

共同研究を終えて

石井正敏

およそ3年に及ぶ共同研究を終えようとする今、これまでの成果を振り返ってみることにしたい。

第1分科会における研究活動は、各委員の研究発表と討議、実地調査、そして座談会という、3つの柱から成り立っている。各委員の研究発表では、4～6世紀を中心とする日韓両国古代史学界の研究状況を反映した研究の成果が報告され、大いに学ぶところがあった。実地調査では、日本・韓国内の主要な遺跡を訪ね、第一線の研究者から説明を受けることができ、日ごろ文献史料を中心として研究を進めている私には、非常に刺激的であり、極めて有意義であった。今回の報告書論文作成に際しても大いに参考にすることができた。

そして各委員の研究報告を重ねた後に行われた座談会は、総括という観点からみて、全体として有意義なものであったと思われる。しかしながら、主に時間的な制約から、十分に議論を深めることができないままに終えてしまったという印象も残る。特に残念であったのは、報告書掲載論文の個別の問題の討議に終始し、日韓関係史を理解する上での基本的な問題、あるいは今後の展望について、ほとんど扱うことができなかったということである。座談会で私が期待していたのは、『日本書紀』『三国史記』等の基本的史料の性格について、今日の両国学界における成果に基づく議論であった。ようやく最終回の最後に触れるところがあったが、議論はすれ違いに終わった感があり、やや心残りのところがある。しかしながら、『日本書紀』については、韓国人研究者による訳注書も刊行され（本分科会の金鉉球委員が中心となっている）、本格的な研究体制が整いつつあり、今後の進展が大いに注目される。個人的には、こうした問題を考える素材として、年表を作成したが、あらためて検討を進めたいと考えている。

これらの研究発表や討議、座談会を通じて、韓国における韓日関係史に対する基本認識、論点の所在などについて知ることができた反面、討議を重ねてきた両国委員の間でもなお、理解や意見を共有しがたい問題が多々あることを、あらためて感じたということが率直な感想である。

さて、個別研究においては、5世紀の日韓関係研究を担当し、倭の五王を主たる研究テーマとして、韓国側盧重国委員と共同で研究を進めた。個別発表及び相互の意見交換等を経て、私は報告書に掲載する論文として「5世紀の日韓関係—倭の五王と高句麗・百濟」をまとめることができた。論じ得た問題は少なく、残された課題は多いが、拙論の序言にも述べたように、歴史認識の問題を共同で討議しようという今こそ、思い込みや先入観を排した実証的な研究が求められているとの立場から、すでに解明されたとみられる基本史料にも再検討が必要であることが理解されれば幸いと思っている。

一方、盧委員は「5世紀の韓日関係史—『宋書』倭国伝の検討—」と題する論文をまとめられ、『宋書』倭国伝をめぐる諸問題について検討を加えられた。同論文の「はじめに」の部分で触れられているように、日本における『宋書』倭国伝・倭の五王研究が長い研究史を有し、現在でも活況を呈しているのに比べ、韓国ではこれまで本格的な研究がみられなかったという状況の中で、全面的に論じられた点をまず評価したいと考える。しかしながら、これまでの研究にみられない興味深い指摘がある一方、課題も幾つかあるように思われる。史料解釈の問題は大方の判断・評価に委ねるとして、主に史料批判に関連して、重要と思われる2、3の問題について、若干のコメントを述べて、共同研究の責任の一端を果た

すことにしたいと思う。

1. 「Ⅲ-1 宋の加号に加羅が挿入された背景」に関連して

まず、451年（元嘉28）に倭国王済が宋から加えられた官号が、「都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」と百済が除かれていることについて、済は加羅を含んだ都督七国諸軍事を自称したが、宋が百済を除いた称号を与えたとみる見解（田中俊明氏・高寛敏氏）に対して、盧氏は、

「倭は〔珍の時に一石井〕百済が含まれた都督諸軍事号をもらえないと知るやいなや、新しい方法を模索するようになり、その方法として〔済は一石井〕百済を除外し、加羅を入れた都督六国諸軍事を要請し、宋はその要請を受け入れ、承認してやったのである。」

と、倭国王が要請の際に、自主的に「百済」を除き「加羅」を加えて「都督…六国諸軍事」を要求したとされている。しかしながら倭国王が自らの意志で百済を除いた都督諸軍事号を要求したとすることには疑問があり、この後、倭国王武は王位継承後初の入貢に際し、「都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事」と百済を含めた七国諸軍事を自称して除正を求めている。盧氏は下文「Ⅵ-1」で倭王武の七国諸軍事要求問題について触れられているが、ここでも武の七国諸軍事要求に触れて論ずる必要があるのではなかろうか。

2. 「Ⅳ. 東征・西服・渡平海北と軍号・郡号」に関連して

（1）「祖禰」の解釈と日本列島の政治的統一時期をめぐって

盧氏論文は、武の上表文に「祖禰躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧處。東征毛人五十五國、西服衆夷六十六國、渡平海北九十五國。」云々とある記事に検討を加え、祖禰は武の祖父と父であるので、珍と済にあたりとし、

「珍と済による征服活動は、大略440年代から460年代の間に行われたとみることができそうである。」

とされている。武の上表文のみを根拠として、440年代から460年代にかけて、わずか20年ほどの間に日本列島の統一がなされたとすることは、あまりにも性急な結論の導きだし方のように思われる。日本列島の政治的統一の時期をめぐっては、大規模古墳の全国的展開など、考古学の成果を参考にすることが必要なことはあらためて言うまでもなく、自己主張に満ちた武の上表文という史料性格にも留意する必要があるのではなかろうか。

（2）「渡平海北」の理解をめぐって

倭国王武の上表文にみえる征服記事では、「渡平海北」とある「海北」がどの地域を指しているかが問題となる。日本人研究者による通説が朝鮮半島と理解するのに対し、盧氏は「海北」は九州地方を指すとされる。その主たる論拠は次のとおりである。

- ①『日本書紀』では韓半島を西・海西と表現している例が多い。
- ②『日本書紀』神代上・第6段・一書第三に「宇佐嶋」が「海北道中に在り」と表現されている。宇佐嶋は現在の大分県の宇佐郡宇佐のことである。

これらによって、「海北」が九州地方を指しているとみなすことができるとされている。

「宇佐嶋」を現在の大大分県宇佐にあてて理解することにも問題があると思うが、「海北」の用例は、周知のごとく『日本書紀』欽明天皇15年(554)12月条にもみえ、「以斯羅無道、不畏天皇、與狛同心、欲殘滅海北彌移居。」とある。この「海北」は明らかに朝鮮半島を指して用いられているとみてよいであろう。盧氏は論文の注67でこの記事に触れて、「韓半島を海北と表現した記事があるが、これは西と表現した記事の頻度とは到底比較にならない。」とされる。しかしながら、記事の頻度よりも、記事の質を重視すべきであり、簡単な注で済ませる記事ではないように思う。

盧氏論文には、この他、武の上表文にみえる「辺隸」を倭の使節団とする理解、あるいは413年の倭国使の献上したという貂皮・人参は百濟から入手してもっていったとされていることなど、いくつか注目すべき解釈であると同時に問題を感じることもあるが、それらの詳細についてはあらためて機会を得て述べることにしたい。

以上、およそ3年にわたる共同研究を振り返り、盧氏論文についてやや感想めいたコメントを述べてきた。私の研究発表に際しても、盧氏をはじめとする委員から、いろいろとご教示やご批判を受けることがあったが、すべてを論文に反映することはできなかった。特に日本列島における政治的統一、古代国家の形成過程と5世紀の日韓関係について、触れることができなかったことを残念に思っている。この問題をめぐっては、近年の考古学調査の進展を受けてめざましい深化を遂げており、倭の五王自体に即しても、府官制の問題を中心に議論が展開されている。報告書論文の検討と残された諸問題について、さらに研究を続け、本委員会における共同研究の実をあげることに、これからも努めていきたいと考えている。